

ハックスレー：「人間研究」をめぐって

Some Comments on A. Huxley's "Proper Studies"

橋本洋右

Yohsuke Hashimoto

1963年11月22日あたかもケネディ前アメリカ大統領の死に日を同じうして、20世紀最大の博覧強記をうたわれる Aldous Leonard Huxley (1894 — 1963) も亡くなった。死因は癌、享年69歳であった。

今ここで最も具体的な Huxley の人間観に触れられるとみられる随筆 **Proper Studies** に即しながら、私自身の **Studies** を連関させて報告することにする。**Proper Studies** とは A. Pope の例の “The Proper Study of Mankind is Man.” から採ったもので、それがそっくり副題のように引用されている。なおその introduction にいう通り、人間考究には measurable な面と unmeasurable な面とがあり、¹⁾ 人間をその全体性として見る場合には unmeasurable の面の考究は等閑視されえない、というのが Huxley の根本の出発点である。

The Idea of Equality

人間は「生まれながらにして自由且つ平等で独立した存在である」²⁾ という J. Locke などの説いた基本的公理に対する Huxley は疑いを持つ。Huxley が疑いを持ったこと、にはさして重要な意味を持つとは思えないが、Huxley の疑いは私達に重要な意味を与える。とくに民主々義が絶対的である（かのよう

に思える)今日の私達,つまり戦後民主々義を奪ったのではなしに既に貰っている世代の私達にとってかなり重要な意味を与える。民主々義を奪う真実を理論的に追体験できなければ民主々義に育ちながら実は民主々義を内部に持たない。私達は私達自身の人生を生きたい意欲を持つや否や民主々義を考えねばならない事情におかれている。

民主々義を支える出発点が近代の **Locke** あたりの主張にその根幹を持っているといわれる時,歴史的事情はその通りとしても原理的な疑いがさしはさまれてくる。政治主義としての民主々義と,人間が生まれながらにして自由,平等,独立の存在であるという思想とは立場が違っているのだ。人間を個人の立場と社会の立場としてみた場合に根本的な相違がそこにある。つまり粗っぽい言い方であるが形而上的な意味に,上下に捉えると,神に対した場合個人としての人間は確かに同一ないし同次元の存在ということはできる。が,そのことがそのまま政治主義としての民主々義を **deduct** しはしない。なぜなら政治は人間の次元の謂わば横に捉えられるものだからである。

Huxley は西欧民主々義の原理の裏づけをキリスト教にみるわけである。ところが “**There is no difference, where infinity is concerned, between one and a thousand.**”³⁾ というように,人間に眼を投ずればそこには平等どころか **one** や **thousand** やの不平等極まりないことは明瞭である。戦後日本の民主々義思想が西欧のそれを全く引きうつされたと見るわけではないが,そして軍国主義が民主々義にとって変ったことは必然であったことに意義はないが,あくまでそれは政治主義であることを私達は忘れてはいけないと思う。それは社会上のルールであり手段なのだ。そして平等の概念にも結びつかず,絶対の正義でも禁忌でもなく,一つの人間的な願望の表現である,ということだ。もし社会的にみて人間を絶対的に規定しえるものがあれば,それはもはや人間の存在条件としての生理内部にくいこまれるものであり,社会的な規定としてうたわれることはありえない。例えば「人間は平等である」ということが恰度呼吸でもするような絶対的な存立条件であれば,「不呼吸」という存在がないように

「不平等」という存在はありえない筈だから。さらに平等が既に存在していれば「呼吸したい」という願望が起らないのと同様に「平等になりたい」という願望や「平等であるべきだ」という命令もありえない。また仮に人間が全て平等であるとして、当為であるとして、そのことが一直線的に行動の原理とはならない。そしてまた何の行動の欲求の源泉ともならない。「人間は全て理性的である」ということは他人を欺す隠蓑としては赦されないであろうと同様に。

Huxley は、いかなる天才と雖も精神構造の内部に浸透している社会的、宗教的伝統が影響力を持つ問題の場合には、そのような利害や信仰が関係しない場合とは思考が全く異っていた、と指摘する。⁴⁾ここに提出された問題は形而上的真理に対する現実的真理、ないし科学的秩序に対する予言者的秩序などの形で捉えられる二面の奇妙な、もしくは器用な真理存在である。一体厳密にいてひとりの人間精神の内部に二者があり、それぞれの真理を有している、ということが意識的にありうるだろうか。天才の無意識な二面が意識的に明らかにされた場合に、少なくとも安らかに真理が二つ存在するということがありうるだろうか。一方が欺瞞であるか、双方がともに不確実なものであるか、孰れかではないのか、或いはまた、もし人間精神に絶対的真理認識というものがありえないならば、あえて精神には二つの部分があるという規定も危うい。確実な一つの保証がない以上一面的真理というのは様々に生じてきて、精神は分裂した雑多な真理認識の集合として総括されてくるのではなかろうか。そうなれば精神そのものに対する全面的な否定、不信頼、もありえる。つまり真理は全て他の、ほんものの人間生活についてその場その場に利用される手段というか、通り道になるのだ。それは謂わば精神的技術であり、本来的な人間基盤に立った真理ではなくなってくる。本来的な基盤にとって不本意で不満足で、全しとはなりえない。ところが出発点はこの不満足を乗り越えた真理の探究にあった筈だ。

民主々義の理論もその当初政治の実際と形而上学との理論的純一性をとろうとした近代人の努力なのであったから。尤も Huxley はその過程を Pseudolo-

gical だと説明する。
“.....they (middle class Frenchmen——筆者) like to have a logical or pseudo-logical justification for their desires; they like to believe that when they want something, it is not merely for their own personal advantage, but that their desires are dedicated by pure reason, by nature, by God himself.”⁵⁾
というわけである。——民主主義理論の出発の18世紀、Descartes は人間を種として同一機能を持ち、生得の観念を備えていると考え(方法叙説)⁶⁾ Locke は精神はなんら生得の観念を持たない白紙であると考え(所謂タブララサ論)⁷⁾ ともに人間の本質を平等であるとする点に同じであった。が、心理学者や生物学者などの研究によって、人は生まれながらにしてタイプは決定的に違っているのであり、人が不平等になるのは教育などの環境ばかりでなく、遺伝的でもある、ということによって近代民主主義活動の背後に横たわる理論は全く支持されぬものとなった。——これが簡単な Huxley の説明であるが一般的でもあろう。

また、もし人間が元来平等で、理性がその本質であったとするなら、Huxley のように人間は同時に平等に道徳をつかむ能力を持つゆえに平等に道徳的な存在である。それが casual な偶然的な環境によって多くの悪徳が生じる。Rousseau の考えに従えば、⁸⁾ 結局自然的な状態の人間、遠い昔の人間こそが唯一完全な理性的且つ有徳的人間であったことになり、動物に近ずけば近づくほど民主主義的でありうることになる。今私達が動物社会を見て、彼らが有徳的であると思う者は誰もいないし、人間の原始社会を心から欲する者は誰もいない。気分的には所謂あこがれを持つ者はいる。が、それも精神的な疲れの際に生じる退嬰的な気分には過ぎない。実際はぼくらは平等であることくらい耐えられないことはない。全ての人間が欲望を同じに発揮し、同じく得、同じく支配する思想には戦慄させられる。

民主主義が平等理論に基いている、というのは都合のよい誤解なのだ。民主政治の根本である、誰にも平等に一票の議員選挙権が与えられる骨組も、人間

が平等だからでなく、不平等であるがゆえに可能なのである。なぜなら不平等さを最も合理的に正しく決定づけ、明瞭に示すのは数量以外になく、各人共通、それこそ平等に一票であるのは不平等を信じるがゆえに彼個人の欲望に対して平等に尊重するからなのである。そして私達にとって最も大事であるのは、この人間相互の尊重のしあいであるから、当然ながら文化の進んだ社会であればあるほど（文化というものを、この人間尊重にあるとするなら、人間尊重を政策にうたうのはおかしい）⁹⁾ 「私」の生活の中で政治の占める位置は片隅であり、それも動物的な、生命を賭けた全力そのものの政治から、より力を分けあった機構の数量の政治を進むのである。

ところで Huxley は **THE RELATION OF THEORY TO ACTION** の章中次のようにいう。

“The equality of all men’ and ‘natural rights’ are examples of simple intellectual generalizations which have justified emotions of discontent and hatred, and at the same time have rendered them easily communicable. ...
...By postulating (quite gratuitously) the congenital equality of all men, by assuming the existence of certain ‘natural rights’ (the term is entirely meaningless), existing absolutely, in themselves and apart from any society in which such rights might be exercised, the discontented are able to justify their discontent, and at the same time to communicate it by means of easily remembered intellectual formulas to their less discontented fellows.”¹⁰⁾

いかなる民主々義運動も、その発生と発展とをこれに似た方法で図式的に説明することができるらしい。これは一般的な心理過程の分析として正しいだろう。が、私は民主々義の原理の場合、Huxley の否定的に響く冷い情調にすっかり与しえないものがある。確かに「万人の平等」ということはナンセンスである。が、万人が種であることの同一性として、等しく、人間らしい欲望を抱いている、ということ疑いのない事実である。これは仮定ではない。したがってこの欲望を満足させることへの期待、追求は生得的であり gratuitous で

もなければ *meaningless* でもない。民主々義が平等思想の仮面を被っていたとしても、いや被っていたがゆえに欲望の表現手段として有効でありえたわけだ。

“The invention of transcendental reasons to justify actions dictated by self-interest, instinct, or prejudice would be harmless enough if the justificatory philosophy ceased to exist with the accomplishment of the particular action it was designed to justify. But once it has been caued into existence, a metaphysic is difficult to kill. Men will not let it go, but persit in elaborating the system, in drawing with a perfect logic ever fresh conclusions from the original assumptions.”¹¹⁾という “THEORY GETS OUT OF HAND” の Huxley の捉え方は穿った心理解釈であるが、それはただ民主々義理論の場合には是認されつつ援用されたということである。不満の合理的解消の構造化が、初期の平等理念と合体し、ないし支援をあおって……というより、実は得たりやおうとばかり利用したということの方が心理的真相ではなかろうか。そこには民主々義を絶対的な倫理的信念とするものと、政治的に有効な手段とのみするものとの相違があ。ことに現代の民主々義の危機を自覚する場合にはなお一層そのことが明らかではないか。民主々義の危機意識、建直し、自己強化を計り、もしくは感じている側の者は民主々義の本来の意味が人間の平等ということより人間の欲望の、むしろ経済思想にかかっていることを最も本質的に識っているといえる。元来が個人的な問題なのである。が、最も公平で力少くして効率よく、それを全体の問題に置きかえる、ないしイコールにさせるためには、第一に個人の欲望が正当化されなければならない、第二に広く伝藩されるだけの説得力を持たなければならない。この要求が人間の存在の平等¹²⁾、理性の完全性の思想を齎らしてきた。だが人は誰も決してそれを信ずるわけにはゆかない。現に誰も信じてもない。にも拘らず民主々義が信じられるのは、それが人間平等を根幹にしているからでなく、他のどんな形態よりも個人の生の領域、を最も豊かに保つと考えられるからである。個人の生の充実感が最も

直接的な願いなのであり、民主々義がそれに与する政治形態であると考えられるからである。個人の欲望を全体の欲望の名のもとに満足させられる最良の手段なのである。

さて、Huxley は “In general it may be said that intellectual prejudices about non-human entities appear to the holder of them as merely reasonable, while prejudices about human entities strike him as being sacred as well as reasonable.”¹²⁾ という。そして Huxley の場合民主々義は human entity になるわけである。西欧に芽ばえた民主々義理念はとりもなおさず平等理念から生まれついた、キリスト教のバックボーンに諧ったものだからである。そしてその偏見はキリスト教文化に沁みついて、偏見とは思われない、自然で、善で、正しく、進歩的であると思われてきた。民主々義の理念が濃く宗教的理念の色を帯びている。Huxley の見方は正しかったであろう。

ところで Huxley の見方は西欧の民主々義に関して正しかった（今でも或いは気分的に正しい面があるかもしれない）。が、人間社会が複雑に進歩してくると、政治の進歩は個人の生活意識の網目の濃さから次第次第に薄く、遠くなってゆく。政治そのものは決して個人生活から離れないにも拘らず、意識上には、その機構のゆえに前面から遠のいてゆくのだ。そして、政治が元は個人の豊かな自由の保証にあるものが、単に欲望を量としてとり出して、捨象し、抽象化し、力学としての区切られた政治の場をつくる。民主々義が進めば進むほどそうなる。それが独裁制に較べて親しめるものであるかどうか、善であるかどうか、はまた別問題だ。ここには形而上学と結びついた信仰、信念は薄い。Huxley のいう如く、人間の行動に関したことは理に諧うばかりでなく、信仰が必要である。が、発生段階の民主々義はいざ知らず、現代の民主々義の理念はその範疇に入りにくい。自然世界に関したことは理に諧う必要があるが信仰の必要はない、という、むしろこちらの範疇に入る、ないし入りつつある、といえるのではあるまいか。個人の生、を考えるときに、行動の原理には妄動でない限り信念の支えがある。それはつねに必要で追求される。政治は追

求された個人の信念とは別の角度で僅かに個人の生を支えている、というのが安定した、進歩した姿である。だから政治原理である民主々義が普遍的、不変的に正しいかどうか、はかかって個人の生の充実感にある。或る国にとっては民主々義が却ってご免だということもありうる。¹³⁾ Huxley は、民主々義の最も強い西欧に住んでいて、民主々義を絶対視する偏見を解説し終章にしている。Huxley は反動的ではもちろんない。存在するものが全て正しく、次の判断をくだす場合に存在に照し合せて決定しがちな考え方を偏見であるというのだ。

Varieties of Intelligence

知性という言葉は日常何気もなくよく使われるが、果して何人がこの言葉を正確に定義できよう。この疑問に知性の特性の一斑がある。知性とは何ぞや、ということの定義をくだすのは甚だ難しいが、人は、本能的にそれを知っていて、一顧すればすぐ誰にも分るものだ、と Huxley はいう。これも知性そのものをいってはず、つまり中味をいわず外側から枠をもってその存在をいったに過ぎないが、“The lower animal comprehend nothing, and yet they contrive to live very successfully. It is the same with us.”¹⁴⁾ ということらしい。これは本能的な生活術の知恵ということである。が、動物の本能的な生きる知恵と人間の知性とが内容的に、または形式上でも、イコールといえるであろうか。上に続けて Huxley は “Even of the things we have most systematically investigated we know incredibly little. And yet we live; and not only live, but invent sciences.”¹⁴⁾ という。逆にいえば、私達は単に生きているばかりでなく多くの科学を発明する。にも拘らず体系的に研究されたものについて信じ難いほど分っていない、ということになる。これは、専門家と非専門家とを分けるということでないことは勿論である。若し Huxley の言葉を矛盾なく解釈するためには、生きることが分るということと、科学を分るということとの

「分り方」の意味は異なることになる。確かに科学の活動も生きる流れの中であって、人間の生活を形づくる運動だ。各種の動物に与えられた個有の知恵を類型的に捉えれば同一である。が、それはまた造物主に対しての、動物という水平の列を見る場合であって、知性を問題にするに足らず、他の生活部分の属性についても同様なことがいえるのだ。若し人間の知性が動物の生きる知恵と **same** なら私達は生得的に定まった量、色合の知性を持っていて、猿が変化を持たないように人間の歴史、変革はなくなる。知性とは人間を他の動物から区別され、特色づけるところの、歴史の原動力の知恵であろう。先の **Huxley** のいい方では少々ペシミステックに響く。具体的な生活術の意味での知恵と抽象的な観念を含めての知性とをないませにして、後者の価値を考えないことになりやすい。勿論、価値とは倫理的・人間的なものであるから直接知性には結びつかない。が、少くとも倫理的なものの発達は労力のない知恵によってなされないし、知性を軽んずることは屢々倫理的なものの緩みを来す。

確かに **“In an absolute sense we can know nothing.”**¹⁵⁾ なのであるが、下等動物にはその自覚が果してあるか。到底あるとは考えられない。¹⁶⁾ その無自覚的知と人間の自覚的知との間には明らかな質の違いがあることは重要であろう。それは必ずしも優劣の問題とはならないにせよ、その違い、或いは差、となる人間の新しく整理する精神作用、が知性の大粋なのだ。いかに体系的に研究しても、それについて信じ難いほど少ししか分っていない、にも拘らずいろいろな科学を創り出す、ということは対象の本質は決して分りえないにも拘らず、対象の実態を整理することは可能である、ということだ。いくらサイバネテクスで整理しても精神の本質は到底分りえないものであるし、たとい人造生物をつくることができたとしても、それは本当につくったのではなしに無機の蛋白質を作用によって生命を持った蛋白質に整理したものであるし……どこまで行ってもものの本質を知りえるものではない。が、人間は営々として整理する活動をし続ける。したがって知性の問題はこの整理の抽象段階での諸問題ということになって来よう。その際抽象そのものの特質について一応明確な意識

を持っておくべきである。この抽象について “An abstraction can never be true. To abstract is to select certain aspects of reality regarded as being, for one reason or another, significant.”¹⁷⁾ であるが, “....., but true enough in the main to provide a working hypothesis for the practical judgment of individuals and social institutions.”¹⁸⁾ として Huxley の論が始まる。これは至極道理である。私達の日常の行動のモーメントは抽象と現実との相関の判断から生まれてくるのであるから。

さて、Huxley は先づ知性をいくつかのタイプに類別する。よし、ある前提から一つの結論に到達するには一つの道しかないにしろ、その出発点として選ばれた前提にはいろいろの種類がある。前提を選ぶ基準は一つなのではなく、各人が各自の全く非合理的な根拠に立って選ぶ。つまりは知性は好むと好まざるとに拘らず予め定められた要素の強い、おのがじし異なる、個性的なものであるということだ。生まれながらの心理的素材の上に環境としての伝統と教育と健康とが複合されて知性は決る。ここでいわれる知性は論理とか論証の過程とかの以前のことが大きいポイントになっている。そしてこの知性を量、程度及び種類によって Huxley は *horizontal and vertical classification of minds* に分類している。譬えば William James と Hegel とでは価値の尺度にはほぼ同じ高さでも、水平的にはかなり隔たった距離がある、という風に。しかし、知性全がてかような諸相に位置づけられるとすると、一体厳密な意味で議論というものの価値はどの程度のものになるのだろうか。のみならず精確になしうるものなのだろうか。Huxley は 神学者 J. H. Newman の考えを曳いて賛成している。—— All reasoning being from premisses, and these premisses arising (if it so happens) in their first elements from personal characteristics, in which men are in fact in essential and irremediable variance one with another, the ratiocinative talent can do no more than point out where the difference between them lies, how far it is immaterial, when it is worth while continuing an argument between them, and when not.¹⁹⁾ —— すると議論な

るものはそれぞれの個性の確認ということにあるのだろうか。それならば個性が初めから他と区別されていることが分っていて、その上議論することはそれぞれの個性の特質を浮び上らせることなのだろうか。しかし実際のところ議論の際にはもっと明確なる満足、一致の満足が要求されている。すると本来的には、根本的には、各人の個性から生ずる前提を持ちつつ一致のために議論しあえる共通の場を齎すものは何なのか。前提そのものをさらに共通の場に抽象して考えられるとはいえない。それはさらに抽象されてその前提を呼び……という風に前提は崩される。行きついた大前提の差を埋めあわせるものが人間的な感情なのであるか、或いは大前提の差を承知しつつ議論によって虚飾された無理な止揚、一致を見たがる習性？そんな莫迦げたことはありえない。すると議論は大前提が殆んど似かよった、いい換えれば、個性の似かよった者の間でなしうる論理のやりとりといえる、少くとも生き生きした共感を得られるためには。即ち議論は大前提が同一の場合にのみ生き生きとなされ、大前提が異なる場合には互いの論理を理解しあっても議論にはならない。

そこでさまざまな知性の型の分類とそれぞれの内容とが次に考えられてくるのも当然である。Huxley の眼目はそこに注がれてくる。先ず Jung を引用して人の「心理の型」を考える。生まれながらに対立する二つの重要な型、内向型と外向型、によって哲学は対立されると見る。“The contrasted systems of philosophy are the expressions of differently orientated psychologies, of incompatible intellectual temperaments.”²⁰⁾ そして “Both (introverts も extraverts も), no doubt, are right, and both, in their exclusiveness of belief, are wrong.”²¹⁾ このようにしてプラトン学派とアリストテレス学派、実在論者と唯名論者、理想主義者とプラグマティストなどの数世紀に亘る対立が捉えられる。単に哲学のみならず宗教においても、娯楽、日常社交の生活においても同じ相互理解の欠除がある。どちらも、あたかもプロクルステスのようだ、と Huxley はいう。両者は互いに異なる領域に立向った時に本来の最も紛れもない特徴を表わす。Huxley はここで内向型の人外界の事実を内向的に扱った例

を Hegel にとり、その「自然哲学」を

“.....he proceeds from within outwards, trying to impose his own inward conception of what the universe ought to be on the external phenomena.”²²⁾ といひ、或いは “Hegel assumes that the outside world must be modelled on the dialectic universe within his mind,.....”²³⁾ という。そして Huxley 自身の見方はというと、なるほど世界はわれわれ人間の眼を通じて理解される以上 “The universe that we know is to some extent created by ourselves. But this is not to affirm that the outside world is dependent on us; that it obeys our dialectic and dances to abracadabrical formulae about abstract and subordinate identity.”²⁴⁾ であり “*The Nature Philosophy* reads for me like the ravings of a lunatic.”²⁴⁾ といひ切る。Huxley は自ら “a moderate extravert” と称してゐて、内向型がプロクルステスの怪物のように見え、根本的共感は不可能である、というのだ。ここで提出された問題は外界の扱い方、世界観、が、つまるところ個人の心理的な傾向にかかっているということである。Huxley が自分は Hegel を否定しつつ、しかもそれを外向型の側から説明しえるならば、元々存在が、心理的分野に結合された心理的存在なのであり、したがって多様だということになる。人はその或る分野に生得的に結びつけられ、そこを信じてゐる、信ぜざるを得ない、ということである。知性は謂わば心理に隈どられ信仰に強化されてでき上ってゆく。大前提と再び謁えて確かめあい融けあふ。知性は論理が信仰の上に組みたてられる相なのだから「真理」は同一の対象について決して一つではなく、同時的に散在するものとなる。それらは互いに説明しあへることはできるが、決して本質に踏み入って理解しあへない。……

これは適確な甚だ寛容で公平な図式的説明である。しかし実生活上ではかほどに綺麗な図式も、ゆかしい寛容も難しい。当の Huxley 自身実際問題として己の信仰にまで固まった知性と一般的で公平な知性の説明とを別問題として区別していることはいうまでもない。というのは信仰はそれほど寛容である筈が

ないからだ。先天的なキリスト教徒 (*naturaliter Christianae*) もいれば、先天的な唯物論者もいる、自分は後者に属するのだ、と Huxley はいう。こういういい方は、寛容ではあっても信仰からいえば虚偽だ。もし生得的な知性を信じて、それを唯物的であるとすれば、キリスト教は存在してこない。にも拘らず自分の立場、キリスト教、とそれぞれの枠をもうける。本当の意味でこうした寛容さは信仰と相容れない。だから一方では自分の立場でないものを *ravings of a lunatic* として排撃せざるを得ない。つまり信仰として繋がれた真理は強烈でなければならず、真理は一つとして恰く塗りこめられなければならないのだ。逆にいえば真理は単に浮き上がったものでなく、信仰に繋がって生き生きとしている、ということだ。さもなくば人の世界観は本当に満足して定着されず、揺がされる。世界観を脅かされることはとりもなおさず彼の生命の安定を脅かされることになる。すると自らの知性の信仰とルールである社会的・一般的通念、解釈、とは合致するかもしれず、矛盾するかもしれない。前者の場合はよいとして、後者の場合には彼にとって全く悲劇となるかもしれず、少くとも生甲斐を持つことができない。²⁵⁾ 科学も哲学も芸術もそうなると諸説の乱立をどれが有力でありどれが低価値であるか、判断が難しい。社会総体の責任において決定する——それが伝統であり、歴史であるといえる。

困難になってくるのは就心理学の立場ではなかろうか。元々わけの分らない、生得的な知性という信仰を持ったそれぞれの心理学者が、そのわけの分らないものを対象にして、つまり二重の難しさを持って、本当の意味で議論しあえる共通の基準がありうるだろうか。可と不可、正常と異常、の判断も謂わば無数の心理カルテそのままであり、誰にも決し難くなる。なぜなら生得的なものには公平も無私も民主々義も何もないからだ。したがって心理学は各心理学者の知性を元にしつつ、心理学を体系づけるために（それは甚だ困難であると同時に無上に面白くなるが）心理を外界に映された、測れるものとして、共通の議論の場をつくりあってゆく。そして彼なりに裁断する……。

Huxley が「序」に述べたような *unmeasurable* な面を考え、あえて知性の

諸相を考えるのも、彼の「穏健な外向型知識人」としての「唯物論的、な裁断」なのである。

そこで、Huxley は自分に照らしあわせながら、対立するいくつかの概念を取りあげて見解を述べている。Huxley には絶対者の存在が信じられない。絶対者とは心理学的に

“.....the introvert's subjective compensation for the multifariousness of strange and hostile objects.”²⁶⁾ だという。シュール・リアリズムは途方もないことなのだ。²⁷⁾ ではまた心理学的に外向型の Huxley には外界の事物一切がそのものとして信じられ、好もしく感じられ、不快が生じない、といえようか。ところが一方で Huxley は外向型の中でも「社交家」は mysterious で“.....how repulsive, how incomprehensible I find the philosophy which is the rationalization of these people's outwardlooking passion for their fellows!”²⁸⁾ という。また感覚追求のために生きる外向型も認めない。²⁹⁾ だが、ここに社交家に対して Huxley が孤独や私生活を信じることは、内向型が絶対者を心理学的に“subjective compensation for the multifariousness of strange and hostile objects” と説明されたものがそのまま通じてはいはしまいか。外向型 Huxley が内向型の心理を辿り、外界の事象にも信じられないものがあるとするれば、外向と内向との差別はどの見地に立ってなされるのが正当となるかの疑問も残りうる。Huxley が「穏健な外向型」を上のような意味で使うとすれば、それは或る人にとって、ないし場合によっては穏健な内向型とおきかえても差支えないことになるかもしれない。が、PRACTICALITY の章で Huxley は

“My own thinking is predominantly extraverted; but I have a great dislike of practical activity. I am interested in the outside world, but only intellectually, not practically. My ambition and my pleasure are to understand, not to act;.....”³⁰⁾ と述懐する。つまり Huxley の外向型は「関心の対象」についていっている。実際的な活動は大嫌いだ、知的関心は実際の世界

にある。或いは逆に内向的な生き方をしつつ実際的な仕事を喜ぶ人間もいる、という。こうなると行動と知性との心理的な関係は常に一定の解釈が成立つということにはならない。外界を好ましく思い、よく理解しながら自らはそこに合流したがる。知性の生得的に持つ心理面と行動の心理面との間に相関関係が薄くなる。外向、内向の大枠を支配するのは前者で、前者が後者に方向を同じくするものを完全な外向型と呼び、方向を逆にするものを穏健な外向型と呼ぶ、ということになる。したがって Huxley が非社交家であったり、感覚主義者でなかったりすることは知性と行動との心理面を背にしあっている、といえる。

(ほかに視覚型と非視覚型,³¹⁾ 幾何学者と解析学者,³²⁾ 特殊な才能のある人となない人,³³⁾ などの対比が説明される。特別目を引く着想でもないが、いかにも外向型知性らしいやり方といえよう。これらの謂わば先天的な知性の型が、後天的な環境、社会によって、いかに差異を及ぼされると Huxley は考えているか、考究すべきことが残された。まだ *proper studies* の入口であるが一応打切ることにする。)

【註】

- (1) 医者、生化学者、実験心理学者、教育者などの人間に就いて知るところは全て計り出される部分である。しかし人にはまだ計り出されない部分が多く、そして計り出されないにも拘らず、いや計られたものを知らないでさえも崇高でありうる、つまり、Huxley が人間を論じられる所以であり、ぼくがそれを考えられることも赦される所以となる。
- (2) cf. "To understand political power aright, and derive it from its original, we must consider what estate all men are naturally in, and that is, a state of perfect freedom to order their actions, and dispose of their possessions and persons as they think fit, within the bounds of the law of Nature, without asking leave or depending upon the will of any other man. A state also of equality, wherein all the power and jurisdiction is reciprocal, no one having more than another,

there being nothing more evident than that creatures of the same species and rank, promiscuously born to all the same advantages of Nature, and the use of the same faculties, should also be equal one amongst another, without subordination or subjection,……” (Concerning Civil Government. chap. II Of the State of Nature. GREAT BOOKS OF THE WESTERN WORLD 35 p.25) 或いは“The natural livery of man is to be free from any superior power on earth, and not to be under the will or legislative authority of man, but to have only the law of Nature for his rule. The livery of man in society is to be under no other legislative power but that established by consent in the common wealth, nor under the dominion of any will, or restraint of any law, but what that legislative shall enact according to the trust put in it.” (Concerning Civil Government. chap. IV Of Slavery. Ibid. p.29)

- (3) Aldous Huxley: *Proper Studies*. (Chatto & Windus. 1957), p.3
- (4) Aristoteles は一方で抽象的な形而上の問題を論じ、他方で奴隷所有者として政治を論じた。また Newton は天体力学をつくと同時に「ダニエルの予言書及び聖ヨハネの黙示録に関する諸考察」「予言辞典」「創造の歴史」の著者でもあった。—— Huxley のあげた例。
- (5) Huxley. *op. cit.* p.6
- (6) cf. 方法叙説の書き出しは次の通りである。「良識はこの世で最も公平に配分されているものである。というのは、だれもかれもそれを十分に与えられているとっていて、他のすべてのことでは満足させることのはなはだむずかしい人々でさえも、良識については、自分もっている以上を望まぬのが常だからである。そして、この点において、まさかすべての人が誤っているとは思われない。むしろそれは次のことを証拠だてているのである、すなわち、よく判断し、真なるものを偽なるものから分つところの能力、これが本来良識または理性と名付けられるものだが、これはすべての人において生まれつき相等しいこと。……」野田又夫訳、世界文学大系「デカルト・パスカル」筑摩書房, p.5
- (7) cf. An Essay Concerning Human Understanding, Book I の書き出しは次のようになっている。 “The way shown how we come by any knowledge, sufficient to

prove it not innate. It is an established opinion amongst some men (Descartes とか Hume とか一筆者), that there are in the understanding certain innate principles; some primary notions, *κοινὰ ἔννοιαι*, characters, as it were stamped upon the mind of man; which the soul receives in its very first being, and brings into the world with it. It would be sufficient to convince unprejudiced readers of the falseness of this supposition, if I should only show (as I hope I shall in the following parts of this Discourse) how men, barely by the use of their natural faculties, may attain to all the knowledge they have, without the help of any innate impressions; and may arrive at certainty, without any such original notions or principles....." GREAT BOOKS OF THE WESTERN WORLD 35 p. 95.

- (8) 「……人間は、誰もが認めるとおり、元来相互に平等であった。それはいろいろの物的原因が或る動物種の中に今日見られるような変異を導き入れるまでに各種の動物がみなそうであったのと同じである。勿論、これら最初の変化が、いかなる手段によって到来したにもせよ、一遍にまた同じやり方で種の全個体を変質させたなどとは思われない。けれども、或る個体は優良になったり、劣悪になったりして、元来それがもっていなかった種々の良質または悪質を獲得するのに対して、他の個体はもっと永くその原本状態に止まった。そして、人間の間では、不平等の第一の源泉とは、このようなものであった。この源泉をこのように一般的に論証することは、その真の原因を正確に指摘するよりは容易である。……」ルソー・人間不平等起原論（本田喜代治・平岡昇訳）岩波文庫，p. 24.
- (9) なぜなら文化は政治のリーダーシップによって変革してゆくものではないと思うからだ。人間尊重が世論として上に登ってゆくのが当然で、政治の先頭にうたわれるのは常態でなく、むしろ滑稽に響くと思う。政治と文化とがひっくり返るめて悪い方向にある状態だと思う。（譬えば国語問題もその好例。）
- (10) Huxley., op. cit., pp. 22—23.
- (11) Ibid., p. 23.
- (12) Ibid., p.26.

- (13) しかし社会が複雑化し進歩するにつれて、個人の生を安全に確立する道は民主々義による政治のほかに支えはあるまい。つまり社会の進歩と民主政治とは同面を向いているといえると思う。そこで全ての国は複雑化しつつあるといえれば、全ての国は民主々義に向いつつある、といえる。Huxley は民主々義の適しない国としてインドを上げたが (Proper Studies が刊行されたのは1927年である) それはインドの国民性にとってということではなしに、インドの歴史性、時代性に鑑みて、ということであろう。
- (14) Huxley., op. cit., p.32. (15) Ibid., p.32.
- (16) もし自覚があるとすれば各動物ごとに生物史とは別に文化史を持っていてよい筈だから。
- (17) Huxley., op., cit., p.35.
- (18) Ibid., p.36.
- (19) Ibid., p.37.
- (20) Ibid., p.43.
- (21) Ibid., p.44.
- (22) Ibid., pp.44—45.
- (23) Ibid., p.45.
- (24) Ibid., p.46.
- (25) Galileo の例はあるいはそういえるかもしれないと思う。
- (26) Ibid., p.49.
- (27) Huxley はアンドレ・ブルトン (André Breton) の「溶ける魚(Poisson Soluble)」を具体的に名指して、これを殆んど分らない、といっている。
- (28) Huxley., op. cit., p.52.
- (29) この例には Huxley はワイルド (Oscar Wilde) を上げて、"Indeed, when I read a book by Wilde, I feel the most intimate personal reasons for rejecting them (Wilde の前提)." といっている。——EXTRAVERTED TYPES の章
- (30) Huxley., op. cit., p.54.
- (31) 心のイメージで物を考える人と、そうでない人。或る人は一篇の詩を暗記できない。イメージをこえて言葉に達せられないからだという。或る人は1,000をこえた数の計

算ができない。それ以上の数は見えないから、十万も百万も事実上同じだからだという。——Huxley のあげた実例。

- (32) 専ら図形，図表，モデルによって考える人と純粹に抽象によって考える人，という
- (33) 音楽や数学の才能が考えられ Beethoven や Einstein が好例とされている。